

## 新OB東労組運動をOB会一丸となって歩み続け、 組織分裂・破壊策動を企てた者たちを許さない大宮地本OB会見解

2月10日、JR東労組中央本部定期委員会が開催された。まさにその日に合せた様に、東京地本・水戸地本・八王子地本の中央委員は欠席し、JR東日本輸送サービス労働組合なるものを結成した。その前段には、組合員に対して①新労組に加入するか、②JR東労組に残るのか、③未加入者になるのか、という選択を組合員に迫っていたという。大きな不安と混乱を組合員に与えてしまったことは間違いないし、この事実を消すことは出来ない。

JR東労組は、18春闘以降、JR東労組は3万5千人もの組合員を失い、「大敗北」と総括した。しかし彼らは組合員の声を素直に聞かず、また事態を受け止めずに「成果」とまで言い続けてきた。そして組織分裂を企てたのだ。同時に、ダイヤ改正の団体交渉を控える重要な時期にも関わらず、これを一切放棄した無責任な行動を許すわけにいかない。

大宮地本OB会は、この間、「現役組合員と共に」を活動の基本に据えてきた。職場生産点の組合員や役員と一緒に悩みを考えて問題を共有してきた。時には経験的な教訓などを述べながら、現実と乖離しないように共有してきた。そしてこれからも「新生JR東労組運動宣言」を運動の基礎とし、現役組合員と共に歩んでいく決意である。このような状況で、組合員に不安と動揺を与え、組織分裂を企てた者たちを到底許すことは出来ない。断固たたくことを明らかにする。

組織分裂者は18春闘の総括同様に、再び同じ過ちを繰り返している。当時、一部の指導者は、素直に春闘の敗北を認めず、自己保身から組合員には「成果」だと誤った主張を続けている。現在、バス職場における不当労働行為についても現場と乖離したことが起きている。過去JR移行時に国労は第三者機関に不当労働行為のたたかいを委ねた。しかしその後も、国労組合員の脱退が続いたことは事実であった。あたかも第三者機関に委ねるたたかいこそが、正しいとばかりに、バス職場の組合員を引き回している。その際、本部に対して個人訴訟者の氏名や団体交渉の議事録なども報告せずに、一方的に「たたかいを放棄する中央本部」と情報等で流布しているこのことは許すことは出来ない。彼らは分裂組合に加入させるための口実として、この問題を利用してのように見える。

えん罪・浦電事件のたたかいの教訓のひとつは、組員と本音で語り合い、労働組合員としての意識を高めることが出来たことだ。「寄り添う」とはこの事で、分会組合員が鍛えられて、役員と一体となった、たたかいで組織が強化された。新たな雇用形態が目指され、増税・年金削減など叫ばれるなか、大宮地本OB会は良識ある東京・八王子・水戸地本のOB会をはじめ、本部OB会と共に、安全で働きやすい会社を目指す現役組合員と組織強化に向けて歩むことを明らかにする。

2020年3月11日  
JR東労組大宮地本OB会